

因子分析の数値実験

による Approach

芝浦工大 福 富 和 夫

§ 1 序

数値実験による因子分析の研究はすでに Wold [7], Jöreskog [4], Cliff & Pennell [2] 等により因子抽出法の比較, サンプルサイズ, loading の大きさ, Communality の大きさ等と loading の推定量の分散の関係, 分布の歪みが推定値に与える影響などについて種々行われてきているが, ここでは因子数について検討するため一連の数値実験を試みた。

まず因子分析のモデルとして次のものを考える。

$$(1) \quad \mathbf{z} = \mu + F\mathbf{f} + V\mathbf{e}$$

$\mathbf{z}$ は p 次の縦ベクトル, F は因子行列で $p \times m$, $V\mathbf{e}$ は Specific 及び Error の項で V は対角行列

さらにモデルに一貫性を与える為 $E(\mathbf{f}) = \mathbf{0}$, $E(\mathbf{e}) = \mathbf{0}$

$E(ff') = I_m$, $E(ee') = I_p$, $E(fe') = 0$ を仮定する。

ここでサンプルの分散共分散行列 (または相関行列) から共通因子数 m を既知として F 及び V の推定値を求めるのであるが、問題は m の値である。

Cattell [1], Guttman [3] が主張するように実態科学特に心理学の立場からすれば非常に多くの因子が存在するものとみる妥当であろう。(Cattell は因子を true factor と error factor に分けて後者はサンプリングにより作り出されたものとしている。更に true factor の中でも多くの trivial なものを無視して影響の大きい因子だけを取扱うとしている。)

一方有意性の検定などにより m を決めるとテスト数 P に比べてかなり小さい値が得られるのが普通である。さらに m に大きな値 ($P-1/2 < m$) を与えると解が一意的にならな場合がある (Thurstone [6]) といわれているが、われわれの実験でも $\frac{P-1}{2} < m$ の場合は全て初期値の与え方により iteration がいくつかの異なる値に収束するという結果が得られている。(ここで解の一意的性と収束の一意的とは別であることに注意。収束については何の結果も得られていない。(Rao [5] 参照) 実際 $\frac{P-1}{2} \geq m$ の場合でも初期値により異なる値に収束した例もある。(表3))

したがって因子数として真の値より小さい値を与えること

になる場合が多い。

いま上のモデルにおいて T をある m 次の直交行列とすると (1) 式は

$$\underline{x} = \underline{\mu} + F T T' \underline{f} + V \underline{e}$$

T を (T_1, T_2) (T_1 は $m \times k$, T_2 は $m \times (m-k)$ の行列) に分割して

$$T' \underline{f} = \begin{pmatrix} T_1' \underline{f} \\ T_2' \underline{f} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \underline{f}_1^* \\ \underline{f}_2^* \end{pmatrix} \quad \text{とおくと}$$

$$(2) \quad \underline{x} = \underline{\mu} + F_1^* \underline{f}_1^* + F_2^* \underline{f}_2^* + V \underline{e}$$

$$\text{ここで } F_1^* = F T_1, \quad F_2^* = F T_2.$$

よって真の因子数 m より小さい値 k を因子数と指定した時因子抽出の Criterion は

$$\min_{T_1} \| \text{nondiag} (R - F T_1 T_1' F') \|^2 \quad \text{であるべきであろう。}$$

ただし $\| \text{nondiag} A \|^2 = \sum_{i \neq j} a_{ij}^2$, T_1 は縦ベクトルが orthogonal な $m \times k$ の行列。

この場合得られた推定値の Communality は明らかに真の Communality より大きくはならない。

ところで実際に行われる因子抽出の Criterion は, P. F. A. では

$$\min_{\tilde{F}} \|\text{nondiag}(R - \tilde{F}\tilde{F}')\|^2$$

また C. F. A. では

$$\min_{\tilde{F}, \tilde{V}} \|\text{nondiag} \tilde{V}^{-2}(R - \tilde{F}\tilde{F}') \tilde{V}^{-2}\|^2 \quad \text{である。}$$

($\tilde{F}$ は $p \times k$ の行列, $\tilde{V}$ は要素が正の対角行列)。

実験の結果は真の因子数を指定した時はこれらの方法(ここでは C. F. A. を用いた。)で正しい因子行列とみられるものが得られたが, 真の因子数より小さい値を指定した時は無縁と思われる因子がでてきており, 得られた Communality も真の値より大きくなるという結果もでてくる。

次に factorial invariance について考えてみると, あるテストの組 x_1 に新しいテストの組 x_2 を加えた場合共通因子の数が変わなければモデルは

$$\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \mu_1 \\ \mu_2 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} F_1 \\ F_2 \end{pmatrix} f + \begin{pmatrix} v_1 & \\ & v_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} e_1 \\ e_2 \end{pmatrix}$$

となり factorial invariance は成立て得らうが, 因子数が増

加する場合即ち Σ_2 に別の新たな因子が含まれているが、前には Specific であったものが共通因子に変る場合は前と同じ因子数を指定したのでは factorial invariance は成立しないであろう。

§ 2. 実験の方法

まず真の因子行列 F を与える。この時 FF' の対角要素が 1 より小さくなるようにして $FF' - \text{diag } FF' + I$ を相関行列 R としこれに Lawley の方法による C.F.A. を用いて因子抽出を行った。この際必要とする初期値は普通はセントロイド法により求め、特にこれと異なる初期値を要するときは主成分を用いた。Iteration の収束は Communality の変化が全て .002 以下になったとき打ち切っている。Varimax 回転の cycle 数は m 次の行列では $m(m-1)/2$ 回で止るようになっていいる。

またの真の因子行列 F と推定値の行列 $\hat{F}$ との比較が意味を持つ即ち同じ型の行列のときは

$$\min_T \|\hat{F}T - F\|^2 \quad (T \text{ は直交行列})$$

を用いて fit させて比較した。(この回転は Varimax 回転と同様の方法で得られ、Iteration の cycle は criterion の変化が .001 以下になったとき打ち切った。)

以上の計算に使用したコンピュータは IBM 1620 である。

§3. 実験とその結果

表1Aの因子行列は 1~6 のテストに対しては初めの二列がその因子行列で他は specific, 1~8 のテストに対しては初めの三列, 1~10 のテストに対しては初めの四列が因子行列になるように作られている。これらの因子行列から作られた相関行列に対し正しい因子数を指定して因子抽出を行った結果が表2A である。この場合は真の因子行列が再現されたとみてよい。これに対し表1Aの因子行列にいくつかの要素を加えて作った因子行列(表1B)の場合は(下線のあるものが新たに加えられた要素) 1~6 のテストでは 4列と 6列のみが specific で因子数は 6 となり, 1~8 及び 1~10 のテストでは全ての列が共通因子となって因子数 8 となっている。これらにそれぞれ 2, 3, 4 の因子数を指定して因子抽出を行った結果が表2B である。この場合は特に $P=10$ でテスト 1 及び 9 の communality が真のものより著しく大きくなっている点に注意したい。

表3は 8×4 の因子行列からの相関行列について初期値をセントロイドと主成分を与えたときの C.F.A. による解の communality を比較したものである。こゝでは $P=8$ だから $m=4$ では $P-1/2 < m$ が成立つ場合である。これ以外でも $P-1/2 < m$ の場合

表 1A

TRUE FACTOR MATRIX A

	1	2	3	4	5	6	7	8	COMM.	2	3	4
1	.65							.46	.4225	.4225	.4225	
2	.62	.49							.6245	.6245	.6245	
3	.59								.3481	.3481	.3481	
4		.43	.64			.48			.1849	.5945	.5945	
5	.63						.47		.3969	.3969	.3969	
6		.40			.62				.1600	.1600	.1600	
7			.60	.48						.3600	.5904	
8		.42	.61							.5485	.5485	
9			.58	.49							.5765	
10		.50	.54								.5416	

表 1B

TRUE FACTOR MATRIX B

	1	2	3	4	5	6	7	8	COMM.	2	3	4
1	.65						<u>.37</u>	.46	.7710	.7710	.7710	
2	.62	.49	<u>.35</u>						.7470	.7470	.7470	
3	.59			<u>.41</u>		.48			.3481	.7466	.7466	
4		.43	.64					<u>.32</u>	.6969	.6969	.6969	
5	.63				<u>.38</u>		.47		.7622	.7622	.7622	
6		.40			<u>.62</u>				.5444	.5444	.5444	
7			.60	.48						.5904	.5904	
8		.42	.61							.5485	.5485	
9			.58	.49		<u>.42</u>					.7529	
10		.50	.54								.5416	

表 3

	m = 4			m = 2		
	TRUE COMM.	CENT.	PRIN.	CENT.	PRIN.	
1	.5776	.5784	.5774	.0012	.5759	
2	.6084	.6073	.6077	.0012	.6048	
3	.5737	.5755	.4821	.1262	.4319	
4	.3969	.3976	.8855	.2095	.1935	
5	.7818	.7753	.7696	.7867	.7920	
6	.5953	.5993	.5993	.5955	.5886	
7	.3481	.4895	.6797	.3357	.0003	
8	.7489	.5639	.4029	.6962	.0514	

表 2A

	COMM.	F1	F2	F3
1	.4232	.6505	.0022	-.0005
2	.6109	.6106	.4802	.0018
3	.3484	.5903	.0022	-.0005
4	.1901	-.0003	.4360	.6393
5	.3974	.6304	.0022	-.0005
6	.1635	-.0000	.7043	-.0011
7				.6017
8				.6095

表 2B

	COMM.	F1	F2	F3	F4
1	.5171	.6872	-.2118	.0505	-.1160
2	.5168	.4521	-.5589	.5073	-.4118
3	.2683	.5119	.0793	.0540	.5332
4	.7052	-.0725	.8366	.7600	.2173
5	.6160	.8003	.0744	-.0872	.0806
6	.0619	.1395	.2060	.1034	.2018
7				.0362	.0539
8				.0778	.1632

1	.4227	.6501	.0057	-.0049	.0060
2	.6014	.6155	.7713	.0134	-.0162
3	.3482	.5900	.0052	-.0045	.0055
4	.5942	.0006	.4210	.6404	-.0003
5	.3971	.6301	.0056	-.0048	.0059
6	.1776	-.0036	.4208	-.0151	.0183
7	.5904	-.0000	-.0000	.5999	.4801
8	.5484	.0006	.7171	.6105	-.0004
9	.5764	-.0000	.0001	.5797	.4902
10	.5402	.0007	.5007	.5399	.0000

1	.8873	.9232	-.0497	-.1160	-.1379
2	.6972	.4728	.1403	-.4118	.5332
3	.6303	.5005	.5435	.1927	.2173
4	.6615	.0786	.1682	.7877	.0806
5	.4830	.6615	.0221	.0539	.2018
6	.1200	.0364	-.0461	.1632	.2909
7	.4389	-.0196	.5430	.3796	-.0254
8	.5485	-.0377	.1976	.6710	.2397
9	.8385	.0010	.8656	.2919	-.0619
10	.5404	-.0323	.1575	.6569	.2081

注: 抽出後 直交回転により真の因子行列にfitしたものを

注: 抽出後 Varimax 回転したものを

全2収束が一意でなかった。 $m=2$ の方は $P-1/2 \geq m$ でも収束が一意でない場合がありうることを示すものである。

Reference

1. Cattell, R.B. (1965): Factor Analysis - An Introduction to Essentials,
I. The Purpose and Underlying Models. Biometrics.
2. Cliff & Pennell (1967): The Influence of Communality, Factor Strength
and Loading Size on the Sampling Characteristics of
Factor Loadings. Psychometrika, vol.32 No.3.
3. Guttman, L. (1958): What Lies Ahead for Factor Analysis?
Educational and Psychological Measurement, vol.18. No.3.
4. Jöreskog, K.G. (1963): Statistical Estimation in Factor Analysis.
Stockholm. Almqvist and Wiksell.
5. Rao, C.R. (1964): The Use and Interpretation of Principal Component Analysis
in Applied Research. Technical Report No.9.
6. Thurstone, L.L. (1947): Multiple Factor Analysis. Chicago, Univ. of
Chicago Press.
7. Wold, H. (1953): Some Artificial Experiments in Factor Analysis.
Uppsala Symposium on Psychological Factor Analysis, Nordisk
Psychologi's Monograph Series No.3. Almqvist and Wiksell.

